

一般社団法人 福山青年会議所

2025 年度 理事長所信（案）

理事長予定者

佐藤 比香留

想造

～The One of Change the World～

はじめに

『人間が想像できることは、必ず人間が実現できる』

SF の父とも呼ばれる、フランスの小説家ジュール・ヴェルヌが残したこの言葉は、中学生だった私の胸に深く刻まれ、今でも私が未来に希望を抱く源となっています。空を飛ぶ車、世界中の言語をリアルタイムで翻訳するアプリ、日常とは違う世界が見える仮想現実空間——過去に誰かが想像した世界が、私たちの目の前に訪れています。人間だけが未来を想像することができます。想像できるから、夢と希望をもって行動を起こし、想像した未来を実現できるのです。私たちは皆、想像し実現する「想造力」をもっているのです。

アメリカの若き銀行員が想像した、青年が真に活躍する社会を実現するために青年会議所は設立されました。青年が社会のために活躍するという崇高な理念は世界中に広がり、恒久的な世界平和の実現を目指し行動を起こすリーダーを生み出し続けてきました。世界は平和であるとはまだいえませんが、青年会議所は必ず恒久的世界平和を実現できると私は信じています。なぜならば、誰かが困っている時に自身の時間と労力、持てるものを全て使って迷わずに行動を起こすことができるリーダーが、青年会議所にはあふれているからです。そして、同じ理念をもった仲間たちが世界中に存在するからです。

誰かのために、純粋な奉仕の精神で行動を起こせるリーダーが世界中で活躍する組織。世界を変えることのできる、唯一無二の組織。それこそが青年会議所なのです。

日本の青年会議所メンバーは「明るい豊かな社会」の実現を目指して、社会課題を解決し続けてきました。現代における「明るい豊かな社会」とは、個性が調和する持続可能な社会と考えられています。持続可能な社会とは、豊かな地球環境と国民一人ひとりが幸せを実感できる生活を、将来世代にも継承することができる社会と定義されています。

しかしながら、昨年発表された世界幸福度ランキングにおいて、日本は 143 か国中 51 位という結果でした。更に、30 歳未満に絞った幸福度では、73 位まで順位を落とします。先進国 38 か国が加盟する国際機関である OECD が示したデータでは、市民の政治参画意識やワークライフバランス、コミュニティ活動、生活満足度といった指標において、日

本は下位に属しています。かつては世界2位であったGDPは中国、ドイツに抜かれ4位となり、労働生産性も低迷しております。

国の未来を創る若者が幸せを実感できず、将来世代に課題を残している現在の日本は、持続可能な社会を形成できているといえるのでしょうか。戦後間もない頃に、「新日本の再建は我々青年の仕事である」という言葉とともに立ち上がった日本初の青年会議所の信念を、戦後から80年が経つ今再び呼び覚まし、圧倒的な当事者意識をもって行動を起こさなくてはなりません。未来の子どもたちの幸せを創るのは私たちであると信じ、誇りをもって活動することが大切なのです。

福山青年会議所創立65周年

1960年、志高い59名の偉大なる先輩方が「社会の進歩、経済の繁栄、人類の平和的幸福を達成すること」を目的として、福山青年会議所を創立されました。65年という歴史の中でこれまで多くの課題に向き合い、奉仕の精神をもって次代のために活動してこられた先輩方に尊敬の念を禁じ得ません。近年では、コロナ禍という未曾有の事態を経験しながらも、Webを使った例会の実施や、諸会議、事業への取り組み方を変化させ、運動を展開してきました。全国城下町シンポジウムやロマンチック街道313事業など、メンバー一人ひとりがまちの未来を想い一丸となって取り組む事業も多く行っていました。私たちは創立65周年という節目の年に、改めて歴史を振り返り、私たちの運動を支えてくださっている市民の皆様、そして最大の理解者である先輩方に感謝の気持ちを伝える必要があります。その上で、私たちが想い描くこれからの福山の可能性を共有し、誰もが明るい未来を想像できる機会を創出してまいりましょう。

私たちの起こす運動がまちに大きなインパクトを残すためには、行政との連携を図ることが大切です。福山市が掲げてきた福山みらい創造ビジョンは、2025年度をもって一区切りとなります。この5年間、「新たな分散型社会の下で、市民一人ひとりの安心な暮らしと希望が実現する都市」を目指し、「新5つの挑戦」と銘打った施策が推し進められてきました。これらの施策を検証し、更なるまちの発展に向けた指針が示される本年は、福山にとって変革の起点となる年になると考えられます。私たちとしても、2021年に描いたまちの姿に向かって歩んできた道のりを振り返る時期がきています。福山に暮らす私たち自身が「こうあってほしい」と思うまちの姿を描き、今何ができるのか、今すべきことは何なのかを考え、新たな時代へバトンをつないでいきましょう。

魅力あふれるまちの想造

福山というまちは、豊かな自然があり、歴史と文化を有しており、交通網も整備され、住み暮らすうえでも、観光するうえでも満たされているまちであります。そのため、細かな不満はあってもどこことなく現状に満足してしまい、まちの課題に対する当事者意識や危機感が欠如してしまっているのではないかと感じます。私自身、7年前に福山に帰ってきてすぐに福山青年会議所に入会をし、まちについて考える機会を多く得てきましたが、福山が衰退するという未来を想像することはできませんでした。

しかしながら、進学や就職を理由に20代の転出超過が10年以上続き、出生率は全国平均よりは高いといっても2.0を超えることはなく、人口の社会減と自然減が続いています。また、備後圏域の中心都市でありながら、宿泊を伴った滞在をする観光客は多くな

く、一人当たりの観光消費額は県内平均を下回っています。このままではこのまちは緩やかに衰退していき、いずれは消滅してしまう可能性さえあります。人口減少に歯止めをかけることは、現実的に困難です。では、どうすればまちの衰退を止めて活性化させることができるのか。私は、全国各地、そして世界中に福山のファンを増やし、持続的に国内外からの来訪者を迎え入れる仕組みを創り出すことが、一つの施策になると考えます。

観光庁が示す観光立国推進基本計画では、今後の方向性として「地方誘客促進」をキーワードの一つとして掲げ、インバウンドの回復を目指しています。一方で、リモートワークを始めとする働き方の変化により、分散型社会への移行に対する注目も高まっています。地方都市にとって、国内外からの来訪者を迎えるには絶好の環境となっているのです。それでは、どうすれば福山に持続的に人々が訪れるようになるのでしょうか。それは、まちのもつ魅力を最大限に活用するほかありません。魅力を認識するには、客観的な視点も必要になります。私たちはこれまで、福山の中で活躍する多くのまちづくり関係者や、近隣地域と連携を図り、魅力発信に取り組んでまいりました。これまで築いてきたつながりを活かし、「福山といえば」という魅力を確立することで、全国、そして世界に名を馳せる経由地ではなく、目的地となるまちを創っていきましょう。

新たな価値を想造する人財の育成

生成 AI が急速に普及し、膨大なデータから答えを導き出すこと、文章やアイディア、画像や動画を作成することが誰でも簡単に行えるようになりました。特定の業務においては作業効率が格段に向上し、AI が人間に取って代わる職種が増加することも予測されています。しかし、AI をはじめとする IT 技術は、あくまでひとの想造力を補助するための道具であることを忘れてはなりません。新たな発想から、新たな価値に気づき、イノベーションを引き起こすのは人間にしかできないのです。

残念ながら、世界的に見て日本はイノベーションを起こしにくい環境にあると私は感じます。他者と違う行動を起こすことが受け入れられづらく、失敗を恐れる風土がどこことなく閉塞感を生み出していると考えます。戦後当時の日本は、大量生産大量消費によって経済が発展し、生産性を高めるために誰もが同じように同じものをつくれること、一つの正解に向けて皆が同じように考え動くことが社会的に求められました。その結果、日本が世界でもトップクラスの経済発展を遂げてきたことは間違いありません。しかし、ものがあふれる現代において、世界的な競争力を確保するためには、価値観をアップデートしなくてはなりません。周囲と同じ考えを強制するのではなく、他者とは違う視点で物事を捉え、失敗を恐れずに挑戦することのできる人財を生み出す必要があります。

2022 年に参加した第 35 回国際アカデミー in 小田原・箱根にて、私は忘れられない体験をしました。各国が抱えている課題や世界平和について話し合う中で、物事の考え方の違いに衝撃を受けたのです。私は、誰かがこういつていた、周りにこう思われるべきだ、という他人の軸で考えていましたが、海外のチームメイトは、自分がどう思うのか、自分がどうしたいのかという、自分の軸で考えていることに気付かされました。確実に正解と呼べる選択肢がない VUCA の時代において、これからの未来を創るリーダーは、自分の考えを信じ抜き自己を表現できる人財であるべきです。時代に即したリーダーのあるべき姿を思い描き、新たな価値を想造できる人財の育成に邁進します。

未来を想い挑戦する新たな仲間とともに

社会課題を解決しようとする時、私たちは課題の根底にある真因を考えるようにしています。真因を解決することで、より大きなインパクトをまちに起こすことができるからです。組織の課題に対しても同様であると私は考えます。会員の減少は組織の抱える大きな課題の一つです。日本青年会議所では、2021年に理念共感拡大グランドデザインを策定し、5ヶ年計画で理念の浸透による会員拡大の促進を行ってきました。福山青年会議所においても、私たちの理念への共感を図りながら、会員拡大に取り組んでまいりました。毎年、多くの人財が福山青年会議所の門を叩いてくださいます。しかし、その中には残念ながら入会には至らなかった方も多くいます。入会を断念された理由は様々ありますが、その方々の不安や懸念を払拭することができなかったことに悔しさを感じます。会員減少は組織全体の課題です。メンバー一人ひとりが当事者意識をもち、福山青年会議所に興味をもたれた方を、一人でも多く仲間として迎え入れるには何が必要なのかを考えなくてはなりません。誰に対してどのようなアプローチが最適なのか、相手のことを思い寄り添いながら共感を広げ、社会により良い変化をもたらす新たな仲間を迎え入れましょう。

新たな環境に身を置く決断こそが、とてつもなく勇気を伴う挑戦です。毎年、多くの人財がその挑戦を通じて福山青年会議所の仲間となっていることに、感謝と敬意を表します。私たちは、その勇氣ある挑戦に見合うだけの成長と発展の機会を提供しなくてはなりません。なぜならば、私たちは社会により良い変化をもたらすリーダーを生み出すことを使命としており、私たち自身も同じように機会を与えられてきたからです。青年会議所の魅力は、多彩な才能にあふれる人財とともに、多様な価値観に触れ、同じ目的に向かって切磋琢磨できる環境にあると私は考えます。その魅力を最大限に活かし、自身のため、まちのために活動すると決意された仲間、多くの学びの機会を提供しましょう。また、私たち自身も新たな価値観に触れ、見識を深めて組織の底力を引き上げる必要があります。メンバー全員で積極的に交流の機会をもち、ともに未来を思い挑戦してまいりましょう。

必要とされる組織であり続けるために

変化の激しい現代において、自身の成功体験だけを信じて行動することは大きなリスクを伴います。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉にもあるように、将来予測が困難な中で適切な判断を下すには、歴史を学び活かす必要があります。歴史とは、他者が積み上げてきた経験の塊ともいえます。私たち福山青年会議所には、あらゆる時代において果敢に挑戦してこられた先輩方の経験が蓄積され、歴史がつくられてきました。私たちには、その歴史をつくられた先輩方の生の声を聴くことのできる機会が多くあります。一つひとつの機会を大切に、先輩方の歴史から学びを得て、新たな時代でも挑戦し続けることのできる環境を築いてまいりましょう。

行政や諸団体に福山青年会議所の名刺をもって話にいけば、初対面であっても好意的に迎え入れていただき、対話していただけます。この関係性を構築できているのも、福山青年会議所という組織がまちの課題に真摯に向き合い、信頼を積み上げてきたからにはほかありません。しかしながら、私たちがどれだけまちのため、ひとのために活動をして、社会をより良くしていたとしても、ふとした言動により社会的信頼が一瞬で失われる可能性もあります。私たちの行動は常に誰かに見られており、一人ひとりの姿が福山青年会議所という組織を形作っているのだという自覚をもって活動することが大切です。

青年会議所には多くの成長の機会があります。しかし、ただ属しているだけでは成長することはできません。また、青年会議所活動をすること自体を目的としていては、得られる成長を自身の環境に活かすことは難しいでしょう。福山青年会議での活動を通じて何を得たいのか、何を成したいのか、自身のもつ内発的な動機を理解したうえで活動することが大切です。自分自身の目的のために、福山青年会議所というプラットフォームを活用し成長できれば、結果として会社や家族、まちのためにより良い社会をつくることができるようになります。そして、福山青年会議所という組織が、まちに、社会に、私たち自身にとっても必要な存在となるのです。メンバー一人ひとりの目的を叶えることができる、誰にとっても必要とされる組織であり続けましょう。

変革の起点となる多様な価値観の獲得

出向とは新たな環境に身を置き、自身の成長と組織の発展のために、視野を広げ見識を深める仕組みです。変化の激しい時代において、画一的な考え方では組織を成長させることはできません。時には、これまでの風土を一新するような斬新な考え方を取り入れることも必要です。新たな価値観を取り入れることは、まちの発展においても重要です。全国各地、そして世界につながりをもつ私たちだからこそ、各地の取り組みや考え方を学ぶ機会を存分に活用し、まちに還元する必要があります。それ故に、出向者は出向先で得られる多様な価値観と学びを、積極的に持ち帰ることが求められます。本年も(公社)日本青年会議所をはじめ、多くの出向先へメンバーを輩出いたします。出向という自身の世界を変える挑戦の一步を踏み出された覚悟を表し、出向者が安心して活躍できる環境を整えとともに、出向者が持ち帰った学びをまちと組織に還元してまいりましょう。

私たちが行う事業以外にも、青年会議所には多くの成長と発展の機会があります。各種大会は、最新の社会トレンドやこれまで知り得なかった価値観を学び、主管する地域の文化や開催に至る想いに触れることができ、全国規模、世界規模の運動の大きさを体感できる貴重な機会です。コロナ禍の経験により Web を通じて学びを得られるようにはなりましたが、多くのメンバーが現地に赴いているのは、現地でしか味わえない価値があるからだとは感じます。私自身、これまで国内外問わず多くの大会に積極的に現地参加をしてきましたが、一度たりとも後悔をしたことはありませんでした。知らなかったことを知り、触れてこなかったものに触れ、自身の価値観を拡げてきました。地域の中だけでは得られない、青年会議所だからこそ得られる成長の機会に積極的に関わり、自身の成長と自身を取り巻く環境の発展に活かしていきましょう。

信頼関係の上に築かれる福山 JC ブランド

企業における広報の役割とは、自社とステークホルダー(利害関係者)との信頼関係を構築することです。ステークホルダーには社外だけではなく、社内の人々も含まれています。ひとと組織、組織と組織をつなぐ役割を担うのが広報なのです。そして、信頼関係を構築するには、一方的ではなく相互のコミュニケーションが必要です。自分たちのもつ情報や、活動に至るまでのストーリーを伝えるとともに、相手がなにを求めているどのようなことに興味をもつのかを理解して、共感を生み出すことが大切です。福山には私たち以外にも、まちをより良くしようとする多くのプレーヤーがいます。その方々の想いを聴きつながりを拡げることは、私たちの運動に幅をもたせ、より大きなインパクトをまちに起

こすきっかけとなります。内側だけに留まらず、広く外へ発信するとともに、新たな情報を積極的に取り込み、まちと組織をつなぎ合わせるのが肝要なのです。

“JC”というブランドは、市民の皆様にもどのように認識されているのでしょうか。まちのために活動している団体と思われていれば良いですが、私たちが意図しない印象をもたれていることや、そもそも認識されていないということが多いのではないのでしょうか。マーケティングの考え方において、ブランドとは「顧客との約束」といわれています。お客様のもつイメージや期待に応え、選ばれる理由となるものがブランドです。ブランドの語源は複数の牛の中から自分の牛を見分けるためにつけた焼印といわれており、他と識別することを目的として生まれた概念です。牛が一頭しかいなければ、ブランドは必要なかったのです。かつて「JC しかない」と言われていた時代には、良い運動を創り出すことに全力を注いでいればまちに存在感を示すことができていたかもしれません。しかし、「JC もある」と言われる現代においては、良い運動を創ることだけではなく、福山青年会議所が他の団体とどのように違って、どのような価値を提供できるのかを明確にする必要があります。“福山 JC”というブランドを確立しなくては、協働するパートナーにも、仲間になり得るひとたちにも選ばれなくなってしまいます。福山青年会議所のもつ強みと、他にはない価値がまちに伝わるように、私たちのブランドを確立してまいりましょう。

組織の礎たる場の創出

組織を組織たらしめるものは、共通の目的意識です。同じ目的をもっているから、相互にコミュニケーションを図り、協働する関係性をつくることのできるのです。福山青年会議所が例会への出席を義務として重んじているのも、この共通の目的意識をもつことを重要視しているからであります。福山青年会議所の例会は、今日にいたるまで洗練され続けています。私が専務理事をしていた 2023 年に「福山 JC さんの例会はビシッとしていてすごいですね」とオブザーブをされた方からよく伺いました。私はその言葉をいただくたびに誇らしくなりました。先輩方からしっかりと「福山 JC の例会」という形を受け継いでいることを実感するからです。しかし一方で、時代の流れとともに社会の価値観が変化している中、漫然と過去を踏襲し続けることが正しいわけではありません。変えてはいけないことと、変革すべきことを見定める必要があります。新たな形を想造する意識を忘れずに、時代に即した組織の礎のあり方を創り出しましょう。

私たちは、誰かに雇われて職務を果たしているわけではありません。トップダウンの組織ではないからこそ、意思決定を行う際に合意形成を図ることが大切です。だから私たちは、多くの時間を使って会議を行い、ときには激しくぶつかりながらも意見を出し合い、より良い運動を皆で推進するための合意を図るのです。このプロセスを疎かにすると、せっかく時間をかけて構築した事業も、所謂「JC ごっこ」とよばれるものになってしまいます。青年会議所運動の根幹となる会議。準備も議論も全身全霊を込めて真剣に取り組み、まちに拮据り課題を解決し続ける真の運動を創ってまいりましょう。

地域とのつながり、未来へのつながり

昨年、大きな変化を伴いながらも、福山市の人口以上の人々を笑顔にさせた、ばら祭。私たち福山青年会議所のまつりへの関わり方にも徐々に変化が起きています。2023 年、

2024年の2年間にわたり、ばら祭における中央公園の企画・運営を私たちが独自に行い、大きな盛り上がりとおふれんばの市民の笑顔を創り出してまいりました。私たちが目指すべきは、市民の笑顔を絶やさずに、より良いまちを、より良い社会を創ることです。まつりづくりはまちづくりであり、私たちだからこそ創ることのできるまつりの姿があるはずです。本年のまつりがどのような形で実施されようとも、まちに笑顔があふれる未来を想像しながら、最高のまつりを市民に届けましょう。

福山市がかねてより誘致をしてきた世界パラ会議がよいよ本年実施されます。実施に至るまでに多くの関係者が並々ならぬ努力と準備を重ね、この時を迎えられていることを忘れてはなりません。この大会をきっかけに、福山市は今後益々グローバル都市となるための多くの挑戦をしていくでしょう。青年会議所には4つの機会があり、その一つに「国際の機会」があります。まちとして進もうとしている道と、私たちがもつ機会を掛け合わせたとき、まちも組織も大きな成長と発展の場を得られるのではないのでしょうか。2023年から検討を重ねてきた大会招致も、3年目となる本年は具体的な道筋を示していくことが必要です。まちの未来を想像し、私たちが今挑戦すべきことを描いてまいりましょう。

おわりに

25年後の未来を想像してみてください。どのような世界が広がっているのでしょうか。日本政府は、ムーンショット目標というまるでSFのような世界を2050年に実現させることを思い描いています。現実離れた空想と一蹴してしまうような内容かもしれません。しかし、常識を変えてきたものの多くは空想のような思いつきから生まれています。世界を変えてきたのは、その空想が実現した未来を本気で想像してきた人々なのです。

想像するには、多様な価値観に触れ、様々なことに挑戦し、経験を積み重ねる必要があります。井戸の中の蛙は、海の大きさを想像することはできません。しかし、一步井戸の外に出て世界の広さを知ったとき、あらゆることを想像し、更なる一步を踏み出せるようになるのです。私たちは、井戸の中に留まる蛙であってはなりません。外に出る一步を踏み出すには、大きな勇気が必要です。しかし、周りを見渡してみてください。私たちの周りには、これまで一步を踏み出し続けてきた先輩方、今まさに一步を踏み出そうとしている仲間たちがいます。青年に成長と発展の機会を提供することを使命とする青年会議所だからこそ、恐れずに想像したその未来に挑戦することができるのです。

あなたは、どのような未来の世界を想像しますか。

あなたは、どのような理想のまちを想像しますか。

あなたは、どのように成長した自分を想像しますか。

誰かが踏み出した小さな一步が、まちを変え、社会を変え、世界を変えるのです。

誰しものが世界を変えることができる。私はそう信じています。

世界を変える一人として、世界を変える一步を踏み出し、ともに未来を想造しましょう。